



医療法人清翠会

介護発表会

2021 年 10 月 14 日 (木)

15 時 00 分 ~ 17 時 00 分



https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_r6cWwj_ySKqxZ30yHToH6A

プログラム

司会： 牧すこやかセンター
牧老人保健施設

ふくもと ひろき
福本 裕樹
まとば たかお
的場 孝王

■ 開会式

■ 開会挨拶

医療法人清翠会 理事長 まき やすひこ
牧 恭彦

1. 「誰か！」の謎解き ～ みんなで探る ～

まきグループホーム いけだ はじめ
池田 肇・今橋 末純

2. 自分らしさは生きる原点

牧ヘルパーステーション おがわ み ゆき
小川 三幸・藤原 恵

3. ご本人らしさを取り戻す為 ～ ケアワーカーとお客様の信頼 ～

牧老人保健施設 かねひろ まさはる
金廣 正治・外山 はるみ

4. 必ず役立つ！ 為になる！ ～ 家族と目指すオムツマスター ～

牧リハビリテーション病院 うえはら み お
上原 美桜・大杉 恒成・和田 真美・青木 香代子

5. 高齢者のストレス緩和を目指した足浴

牧整形外科病院 なかむら あや か
中村 絢香・石丸 美規子

6. つなぐ ～ 有志と共に築く介護 ～

牧すこやかセンター よしもと す ず
吉本 朱寿・尾鷹 志乃絵

7. 荷物の入れ間違いインシデント ～ 絶対に間違えない為に ～

牧リハビリテーション病院デイケア門真 たかはし ちとせ
高橋 千歳

8. コロナ禍におけるレクリエーション活動の報告

まきデイサービスセンター おちあい な み
落合 奈見

■ 総評

牧リハビリテーション病院 看護部長 まつお あやみ
松尾 文美

■ 閉会式

「誰か！」の謎解き ～ みんなで探る ～

まきグループホーム 介護部 2階

○池田 ^{いけだ}肇 ^{はじめ} 今橋 末純

【はじめに】

グループホームでは、施設全体が一つの家族のように“お家”のような雰囲気の中、ゆっくりとした居心地のよい環境で、楽しく安心して過ごして頂くことを基本にしている。

K様はリビングで飲食される時以外は「誰か」と大声で叫ばれることがあり、他の入居者様が気にされて不穏になられる。K様の気持ちを考えたケアで安心して、穏やかに過ごして頂けるのではないかと考え「誰か」の意味を職員全員で探る、この取り組みを行い報告する。

【入居者紹介】

K様 96歳 女性 現病歴 認知症 高血圧症 嚥下障害
要介護3 障害高齢者自立度B2 認知高齢者自立度Ⅱb

【現状】

起こして欲しいの「誰か」から始まり、排尿、排便の訴え時、トイレ内でも声あり。フロアでは食事以外は、どのような要求の時でも「誰か」と大きな声で呼ばれる。

【取り組み期間・内容】

5月～7月

- ・職員全員にどのような時に声を出されるのか、K様の気持ちはどうなのかを、アンケートを取り現状を把握した。
- ・日中はフロアにて過ごして頂けるようにK様の気持ちを考えた対応を行う。

【結果】

居室で過ごされている時の「誰か」の声は一人でいる事の寂しさや不安、リビングでは退屈、空腹、トイレの訴え、帰宅願望、体調の変化等すべての事の意味を持つ「誰か」であることを改めて知り、職員一人ひとりがその状況時のK様がどのように思っておられるのかを考え試行錯誤し、毎日を普通に穏やかに過ごされる時間も少しずつ増えた。

【終わりに】

残念ながら取り組み途中でK様はお亡くなりになりましたが、皆様とのボール遊びは力一杯真剣な表情で参加されていた。自分の思いが伝わらず、テーブルを叩いて怒りを表される事もあったが、本来の姿で過ごされる事もあったのかと思う。これからも入居者様の気持ちを考えた支援を行っていきたい。

自分らしさは生きる原点

牧ヘルパーステーション

○小川^{おがわ} 三幸^{みゆき} 藤原 恵

【はじめに】

高齢者は住み慣れた環境の中で生活することで自分のペースで自分らしく過ごすことができる。

今回は、1人暮らしの利用者が自宅での転倒をきっかけに介護が必要となったが、なかなか受け入れる事ができず悩み苦しみ、それでも最後まで自分らしく生きぬかれた経緯を発表する。

【利用者情報】

氏名：A様 年齢：95歳 性別：女性 家族構成：独居（甥が滋賀県在住）

介護度：自宅での転倒後、要介護4 病歴：認知症・高血圧・慢性胃炎・難聴

サービス期間：平成26年10月～令和2年7月

【経過】

週1回生活援助のサービスがスタートするが、半年後「まだまだ1人でやれる」というA様の希望でサービス中止となる。その後、右足指にできた蜂窩織炎、褥瘡治療の通院が必要となり、週1回の通院介助を再開した。サービス当初はご自分で身支度され待っておられたが、少しずつ曜日、時間の認識が困難となり、通院時間になっても居眠りをされる事が増えた。鍵が開いていないため通院に支障が出始めていたので鍵預かりの提案をした。A様は被害妄想があり「鍵を預けたら留守中に物が盗まれる」と頑として拒否され鍵預かりが出来ないまま2年が過ぎた。階段昇降が不安になり、2階のベッドサイドに洗面器、ゴミ箱を置かれその中に排尿管をされる事が続き、不衛生、危険性を伴うと判断し1階に設置した。

転倒され右臀部に強い痛みを伴い、ベッド臥位状態からご自分で身体を動かせなかったので毎日朝、夕のサービスとなり、今までご自分で出来ていた事が急に出来なくなる不安、現状を受容できない苛立ちから「ややこしい、わからん」と口にされるようになり不穏な日が続いた。

訪問看護と連携を図り食事量、水分量、排便状態を情報共有した。栄養のバランスを考慮し購入するも食べるものは決まっており、食べたい物を食べただけ食べられた。尿失禁をされていても「あとで自分でする」と一切更衣の介助はさせてもらえず、「勝手に触らんといて」と言われ限られた支援となった。ご飯を食べる時は食材を確認しゆっくり味わって食べられ、薬も毎回数えて飲まれるので、次の行動になかなか移されずサービス時間内には終わらないが無理強いはず、A様の生活スタイルを崩さないようヘルパーで共有し支援を行った。精神的な不安から朝早くご近所を訪問され「看護師、ヘルパーに電話をしてほしい」と訴えられるようになり、ケアマネジャー・訪問看護師が施設なら常に誰かが居て不安な思いをしなくてもいいと何度も提案し、ご本人も納得の上、入所の運びとなったが、暫くの間“施設に入れば安心して暮せる”“この先もひとりで自宅で暮したい”という心の葛藤は続いた。

【考察】

A様は周りの環境には左右されず、ありのままの自分をさらけ出し、自分の考えを大切にしておられた。ヘルパー、他職種全員がA様の考えを尊重したからこそ、最後は納得され施設へ送り出すことができた。不穏な日、受け入れてもらえない日もあったが、サービスに入っているヘルパーが同じ方向性で支援を行った結果、A様との信頼関係が構築できヘルパーを頼りにされ、訪問を心待ちにされるまでになった。何より、限界まで住み慣れた自宅でA様らしく生活する事が生きる原点に繋がった。

ご本人らしさを取り戻す為 ～ ケアワーカーとお客様の信頼 ～

牧老人保健施設 介護部通所

○金廣 ^{かねひろ} 正治 ^{まさはる} 外山 はるみ

【はじめに】

当施設では、介護士によるリハビリテーションを意識したレクリエーションやイベントなどを充実させ、チームの力を最大限発揮した生活のサポートを重視している。今回、ADL・QOL向上を目標とし、成果を得られた対象D氏に対して取り組んだケア・活動について報告する。

【対象情報】

D氏 69歳 女性 要介護5 H30年7月、クモ膜下出血で入院し胃瘻増設となる。
麻痺拘縮なし。自発的な活動・発語がなく、意思の疎通・伝達が困難であり、生活全般において介助が必要。H31年3月より当施設利用開始となる。

【取り組み内容】

- ・当施設利用開始時より、家での様子やデイでの変化など、連絡帳や送迎時を通じて家族様と情報共有を行う。他利用者と交流が図れるよう配席を考慮し、自席でできる塗り絵を提供する。
- ・利用中はベッド臥床されているので、胃瘻注入後、1時間の離床時間を確保し徐々に離床時間を増やす。D氏が好きな動物の映像上映、風船バレーや体操などのレクリエーションを提供する。
- ・午後より利用時間を車椅子で過ごし、歌詞カードを見ながら口や手の動作を促しながら音楽体操レクリエーションの参加を行った。
- ・D氏の様子を、よりよくわかる為、D氏の変化・気付きを収集するD氏専用のノートを作成し、スタッフ全員に記入してもらう。タコ焼き作り等のイベントへ参加を促す。

【変化内容】

- ・離床時間を確保することで、自席で過ごされる時間が長くなり、他利用者の談笑を聞き微笑まれる様子と明るい表情への変化が見受けられた。塗り絵を提供しても、興味を持たれずD氏の目線に合わせる目的でボードに挟んだ塗り絵を提供する事で、単色のみ使用していた塗り絵が、見本を参考にしながら色分けを行えるようになった。
- ・座り直しをし、座位が安定する事で、自発的に体を動かしゲームに参加される。犬の映像を見ながら、「飼っている犬よりも本当は猫が好き」と冗談を交えた会話、「一緒に唄いましょう？」と他利用者へのお誘いの声かけなど、コミュニケーションを楽しまれるご様子であった。
- ・嚥下機能の向上に伴い食事が開始し、離床の疲労感なく午後は車椅子で過ごせるようになる。ベッドでの口腔ケアから洗面所でのうがいが可能になった。
- ・「果物の柿が好き。牛モツと納豆が嫌い。臭いが嫌！」と食べ物の好みを話される。看護師がバルーンカテーテルより尿を破棄する際「今日はしっかり出ている、大丈夫やと思う。」と発言があり、体調を気にかけるご様子などD氏専用のノートを活用する事で、スタッフ全員が多くの情報を共有し、D氏に寄り添ったコミュニケーションを図れた。
- ・たこ焼き作りでは、何度か失敗しながらもたこ焼きを回し、最後までイベントに参加できた。イベントに参加できたことで家族様より喜びの報告があった。

【まとめ】

上記の取り組みを行う事で、D氏の変化が見られた。他者との交流を深め、家族やスタッフ間で情報共有を密に行うことで、歌やお話好きな社交的であるD氏らしさを知ることができた。D氏の自分らしさを知ること、生活全般における意欲低下を認めるD氏にとって刺激のあるコミュニケーションが図れ、信頼関係を構築できた。また、離床時間を確保することが、活動量の向上と言葉を発する機会を増やすことにつながった。さらに、リハビリテーションに加えレクリエーションを通して他者との関係を有効に持つことで、意思伝達能力の向上とQOL向上につなげることができたと考える。“口から食べる”“歯磨きをする”といった本人にとって当たり前であった生活を少しずつ取り戻すサポートをチームの力でできた。何よりも、“D氏に昔のように明るく笑顔で会話ができるようになって欲しい”との家族様の思いとご協力があつて、変化をもたらすことができたと感じた。現在も取り組みを少しずつ変えながら行うことで、これからも、D氏・ご家族様を笑顔にできる通所リハビリを目指して、チームケアの一員として取り組んでいけるよう努力していきたい。

必ず役立つ！為になる！ ～ 家族と目指すオムツマスター ～

牧リハビリテーション病院 看護部

○^{うえはら}上原 ^{み お}美桜 大杉 恒成 和田 真美 青木 香代子

【はじめに】

牧リハビリテーション病院の介護士は受け持ち制を導入している。日々の業務の中で日常生活援助を行っているが、特に排泄に関することは排泄用品の選定や排泄カンファレンスの記録など、介護士が中心となり実施している。

介護発表のテーマを介護士合同会議で討議し、入院中の排泄に関しては積極的な関りを持てているが、自宅に退院が決まった患者や家族に寄り添っているだろうか、自宅での排泄援助で不安を感じることが無いように、介護士としてもっとできることがあるのではないかと、そういう意見が出てきた。そこで、在宅復帰をされる患者でオムツが必要な方への排泄指導パンフレットを作成し、家族指導に介護士として関わることを、統一した指導援助が出来ることを目的として取り組んだ経過を発表する。

【実際の取り組み】

2021年4月より患者・家族に向けての指導パンフレット作成開始。その際、「患者家族が見てわかりやすいこと」「パンフレットを見て役立つ、為になること」その二つを意識して作成に取り組んだ。オムツを必要とされる方は高齢者がほとんどであることを考え見やすい字の大きさにし、介助場面をイメージしやすいようにスタッフがモデルとなった写真を多く使用した。男女でオムツの当て方は違うため男女別に作成。ページの最後には受け持ち介護士が患者に合わせたアドバイスを個別に書き込めるページも付けた。

パンフレットが仮完成した後はそれを使用し、『家族に向けてこのようにオムツ交換の指導を行います』という説明も兼ねた研修を全介護スタッフに実施した。そのうえで介護スタッフにアンケートを実施し、パンフレットの変更点や実際に指導するとなった時の意見などを募った。オムツのギャザーについて写真では分かりづらい、臀部にオムツをあてる際の位置をより明確にした方がいいなどの指摘を受け、それに沿ってパンフレットを変更し「やってみよう！オムツケアブック～男性編、女性編～」本完成とした。

【考察】

2021年4月から2021年9月の5か月間をかけてパンフレットを作成し、スタッフアンケートでは「患者・家族だけでなく新人介護士指導にも使用できる」「良いものが出来たと思う」といった肯定的な意見を貰うことが出来た。今後は受け持ち看護師と相談しながら、在宅復帰を目指す患者・家族に積極的に関わりをもっていく。完成したパンフレットはその手助けになると考える。

【まとめ】

排泄指導パンフレットは今回の完成で終わりではなく、これからも内容を見直し必要に応じて変更する。また日常生活援助を実施する介護士として知識、技術を高め、これからもより患者に寄り添う介護ケアを追求していく。

高齢者のストレス緩和を目指した足浴

牧整形外科病院 看護部 5階病棟

○中村 ^{なかむら} 絢香 ^{あやか} 石丸 美規子

【はじめに】

牧整形外科病院は、80床の整形外科の急性期病棟で、入院患者の約半数は75歳以上の高齢者である。手術や入院直後の集中治療終了後は、点滴・リハビリ・食事・清潔ケア以外は自由時間となる。しかし、認知機能の低下した高齢者の場合、刺激が少なく活動量も低下する為、昼夜逆転傾向になる患者も多く夜間不眠が発生しやすい。また、コロナの影響を受け、面会・外出外泊禁止やマスクの長時間着用により不眠・不穏を助長させているのではないかと感じた。

そこでADL向上を目指し、デイルームの大きな窓から見える景色を眺めながら日光浴をしたり、アロマオイルを用いて足浴を行い、離床時間・活動の場を増やしストレス緩和を目指したいと考えた。

足浴効果については、末梢循環への作用¹⁾、自律神経系への作用²⁾、入眠への作用³⁾、リラクゼーション効果など様々な報告がされてきた。また、アロマセラピーにはリラクゼーション効果があることが知られており、精油を吸入させたところ、心拍数が減少しリラクゼーション効果を認めた⁴⁾と報告されている。今回、ADL向上とストレス緩和を目的として足浴を実践したので経過を報告する。

【研究期間】

期間：2021年6月1日～2021年7月31日

【研究方法】

対象：①認知機能の低下がある。 ②見守りが必要である。 ③病状が安定している。

- 1) 5階病棟の上記患者を選出し、α波音楽やクラシック音楽をかけながら足浴を実施。38～40℃で患者の好みの温度のお湯を用意し、湯量は外踵部まで浸かる状態とした（約5L）。時間は10分～15分とし患者に合わせた。足浴は浸漬させるのみとした。デイルームで日光浴をしながら足浴を実施。
- 2) シャワー浴中にアロマオイルを用いて足浴を実施。アロマオイルはエッセンシャルオイル（生活の木、原産国：スペイン・ブラジル）を使用した。香りは「活力・元気さ」の得点が低下しなかったグレープフルーツ・オレンジスイート⁵⁾を選択した。
- 3) 思い出話や興味のある話を聞き出すように努めた。
- 4) ADLに合わせて足浴の場所を選択した。
- 5) ①足浴を取り入れた後の夜間の入眠調査を行う。
②5階病棟の看護師・ケアワーカーより足浴に対する聞き取りを行う。
③足浴を行った患者の感想の聞き取り。

場所：5階病棟デイルーム、4階入浴室

【結果】

足浴実施期間の参加人数は10名であった。

足浴に参加された患者の反応は「え？お呼ばれしてもいいの！？」と喜んだり「眠たいからいらんわ」と言う患者もいたが、実際に景色が目に入ると「うわぁ～凄いなあ」と声を上げて景色を見ていた。また、足浴をしながら、家族との昔の思い出や定年まで働いた職業について話した。離床時間の確保とコミュニケーションが増えた。夜間の睡眠や不穏にどのような効果があったか調査を行った結果、足浴開始後は入眠に時間を要したが5時間続けて睡眠が出来た患者、トイレ以外は眠っていた患者やまれにごそごそ起きている患者がいた。

スタッフへの聞き取り調査の結果、気分転換や浮腫対策になると足浴への関心が高く、継続が望ましいと考えているスタッフが半数以上であった。

代表症例 S さん

97 歳。他病院で入院中にうつ症状を認めたことがあり、家族も心配していた。「ここから動きたくない、もう死んでもいいからほっといて」など拒否的で沈んだ日々を過ごしていた。クラシック音楽を流し、アロマを焚いて、足浴とシャワーを行い、安楽に過ごせるように努めた。強ばった表情が緩み、「気持ち良いわ」と笑顔が見られるようになり、菜の花畑の歌を口ずさんでいた。それから、徐々に明るくなり、車椅子を自分で操作するようになった。

【考察】

骨量の低下や筋力・バランス機能の低下などによる転倒により、急な入院で環境の変化が起き、せん妄の発症や認知機能の低下を招きやすい。少しでもこのような症状の発症を防ぎ、ADL 向上を目指したいと足浴を開始した。コロナの影響もあり短期間ではあったが、毎日決まった活動を行うことで、患者の活気と覚醒に繋げることが出来た。また、足浴以外でも患者の元へ行き、会話をする関わりを持つことが増え、ケアワーカーにも介護の質の変化が見られる場面が増えてきた。

【結論】

今回の活動を始めるにあたり、看護師や理学療法士に時間帯の相談や ADL 向上への助言を得て実施したが、ADL 向上に対する意識を見直したことで患者の笑顔を多く見る事が出来た。今後も患者の情報を共有して連携を取り、業務を遂行して行きたい。

引用・参考文献

- 1) 佐伯由香：リラクゼーションを促すケアとしても足浴の可能性
臨床看護 33(14):2098-2106, 2007
- 2) 吉岡一実, 吉原嗣, 平川雅一, 他 (2008): 足浴によるリラックス度と手背皮膚温との関係
上武大学看護学部紀要, 4, 17-21.
- 3) 宮下和美, 佐伯由香, 岩月和彦 (2000): 自律神経への影響からみた効果的な足浴方法の検討
看護人間工学研究誌, 2, 1-6.
- 4) 瓜巢敦子, 下元美佳, 箕浦文枝, 他 (2013): 足浴時間の違いが深部体温・睡眠に与える影響
岐阜医療科学大学紀要, 7, 119-122.
- 5) 佐々木祐子, 安田智美, 他: スイートオレンジの吸入が生体に及ぼす影響—ストレスアナライザーと POMS を指標として—新潟青陵大学紀要, (3), 133-139, 2003.
- 6) 三浦哉, 杉野恵, 越智玲衣: 一過性の精油環境が動脈スティフネスおよび血管内皮機能に及ぼす影響
アロマテラピー学雑誌, Vol.15, No.1, 122-126, 2015
- 7) 千葉和夫: 高齢者の閉じこもり予防と生きがい支援の接続に関する研究, 2009

つなぐ ～ 有志と共に築く介護 ～

牧すこやかセンター 介護部

○吉本^{よしもと} 朱寿^{すず} 尾鷹 志乃絵

【はじめに】

当施設では、6 月より海外から新入職員として、3 名を受け入れることとなり、法人全体でも初の試みとなる。そこで、当施設にどのような方が入職され、約3カ月間どのように指導を行ってきたかを報告する。

【取り組み】

○外国人介護士の導入の目的と目標

- ・外国人介護職受け入れに關しての必要資格
- ・特定技能による在留資格
- ・日本語能力試験の目安

○新入職員の紹介

- ・聞き取り調査にて、人柄や生い立ちについての紹介

○指導カリキュラム

- ・当館の研修マニュアルを作成し、2 年計画教育訓練カリキュラムとして、職場での OJT による実践的指導から、2022 年に行われる、法人内の初任者研修にて行われる OFF-JT 研修による、人材育成を目標としている。

【考察】

指導に当たる職員に同行し、介助を實踐して業務の流れを知ってもらう指導方法を行い3カ月たった今では、自ら考えて行動できるまで成長した。しかし、介護技術の基本と意義についての理解が浅い為、その指導が課題となる。今後、介護技術の基本を理解した上で、利用者に応じた介護方法を自ら考え、實踐できるよう指導していきたいと思う。

【終わりに】

外国人介護職の方にとって、職員や利用者とのコミュニケーションは、言葉のハンディキャップや文化の違いで戸惑いや苦悩があると思われるが、果敢にチャレンジされている彼女達の姿は利用者にとっても、我々職員にとっても、いい刺激になりそれを乗り越え、一人の人間としてお互いを尊重し、「ここで働くのが楽しい」と、思える環境作りに力を入れ、これからも共に歩んで行きたいと思う。

荷物の入れ間違いインシデント ～ 絶対に間違えない為に ～

牧リハビリテーション病院 デイケア門真

○^{たかはし}高橋 ^{ちとせ}千歳

【はじめに】

2019 年度に発生したインシデントの統計をとり、それぞれの種類と要因を調査した。そのインシデント減少の為の取り組みと結果を報告する。

【統計と調査】

2019 年度に報告されたインシデントは 34 件である。34 件のインシデントの種類をみると、怪我が 6 件、転倒が 5 件、誤薬が 1 件、その他の内容が 22 件であった。今回は多くを占める 22 件の『その他』のインシデントに注目し調査を行った。『その他』の発生場所内訳は、フロア 12 件、脱衣場 5 件、浴室 1 件、車内 2 件、駐車場 2 件であった。また『その他』の発生要因については、問題が利用者側にあるのが 3 件、スタッフの確認不足や不注意、又は判断ミスによるものが 19 件という結果で、発生要因のほとんどが 確認不足や不注意によるものとわかった。

怪我や転倒などの原因となる環境不備については整備することで改善したが、確認不足や不注意については、注意喚起だけではなかなか改善しなかった。その中の、脱衣場で発生した 5 件のうち 3 件が『荷物の入れ間違い』という同じインシデントであったことに注目した。

【原因と考察】

3 件のインシデントをみると、全て車イスに掛けている利用者の鞆で発生していた。車イス対応の利用者は鞆が比較的大きく脱衣かごに入らない為、車イスに掛けて管理している。また脱衣スペースの関係上、車イス自体も通行の妨げにならない場所に移動させている。そして車イスと一緒に移動させた鞆に荷物を入れる際、確認不足で他者の鞆に間違えて入れてしまう、というのが入れ間違いの共通原因であった。この同じうっかりミスは個人の意識改善だけでは完全に無くすことは困難と感じた。

【対策と結果】

対策として車イスの利用者の鞆に名札をつける事に決めると、しばらく荷物の入れ間違いは無かったが、翌年の 2020 年度に、再び同じ原因による入れ間違いが発生してしまった。この時は対策を実行出来ていたが、その利用者の鞆に入れたという心当たりのあるスタッフがいなかった為、無意識に荷物を入れたものと判断し、次の対策として無意識では荷物を入れられない対策を再度検討した。車イスに掛けた鞆の口をしっかりと閉め、名札は目立つ所に付けるようにした。そうすることで鞆を開ける時にしっかりと名札の確認ができる。簡単な対策ではあるが、それぞれが確実に実行することで『荷物の入れ間違い』はゼロになった。

同じ確認不足や不注意を繰り返した場合は、具体的に何の確認不足であったのかの追究と、それを起こさない仕組みを検討し、対策をたて実践することが重要である。

【まとめ】

このような『荷物の入れ間違い』などのインシデントは決して小さなものとは思わず、事業所の信用をなくす重大なインシデントと捉え“絶対に間違えない”ために、徹底的に追究していく事が重要と考える。これからも、ご利用者ならびにご家族に安心と信頼されるサービスが提供できるようインシデント撲滅に努める。

コロナ禍におけるレクリエーション活動の報告

まきデイサービスセンター

○落合^{おちあい} 奈見^{なみ}

【はじめに】

コロナの流行により、全国のデイサービスセンターでは、取り組みやレクリエーションを大幅に自粛することとなった。当施設でも、外出などを伴う行事・レクリエーションなどが中止となり、全体の雰囲気が悪くなったり、利用者様からも不満や自粛疲れの声、カラオケ再開の要望が聞かれることとなった。そこで、音楽レクリエーションやカラオケを安全に行う方法を検討、再開できたため報告する。

【課題】

コロナ禍でのレクリエーション（カラオケ）復活にあたり、以下4つの課題が上がった。

- ①共有する物（マイクなど）を介する接触感染の防止方法
- ②マスクで顔が隠れてしまい、表情が見えなくなることへの問題
- ③発声に伴う飛沫の防止方法
- ④密になることを避けたまま（ソーシャルディスタンス）場を一体化させ、盛り上げる方法

【手順・方法】

- ①接触感染対策：皆と共有するものは、毎回使用後消毒する。（マイクは、ガーゼで包む）
- ②表情が見えなくなること：歌う人は（ななめ）前へ出てきてもらい、お互いの表情が見えるようにした。
- ③飛沫物の防止：利用者様には、各自マスクの着用を依頼し、一人一人パーテーションで区切った。
- ④場の一体化の問題：薄明りの中でミラーボールを使用し、カラオケボックスの雰囲気を出した。歌わない人には、楽器をならして楽しんでもらった。楽器に触れる前にはアルコールによる手指消毒を徹底した。
- ⑤換気：レクリエーション終了後には、換気をし、室内の空気を入れ替え、感染リスク軽減させている。

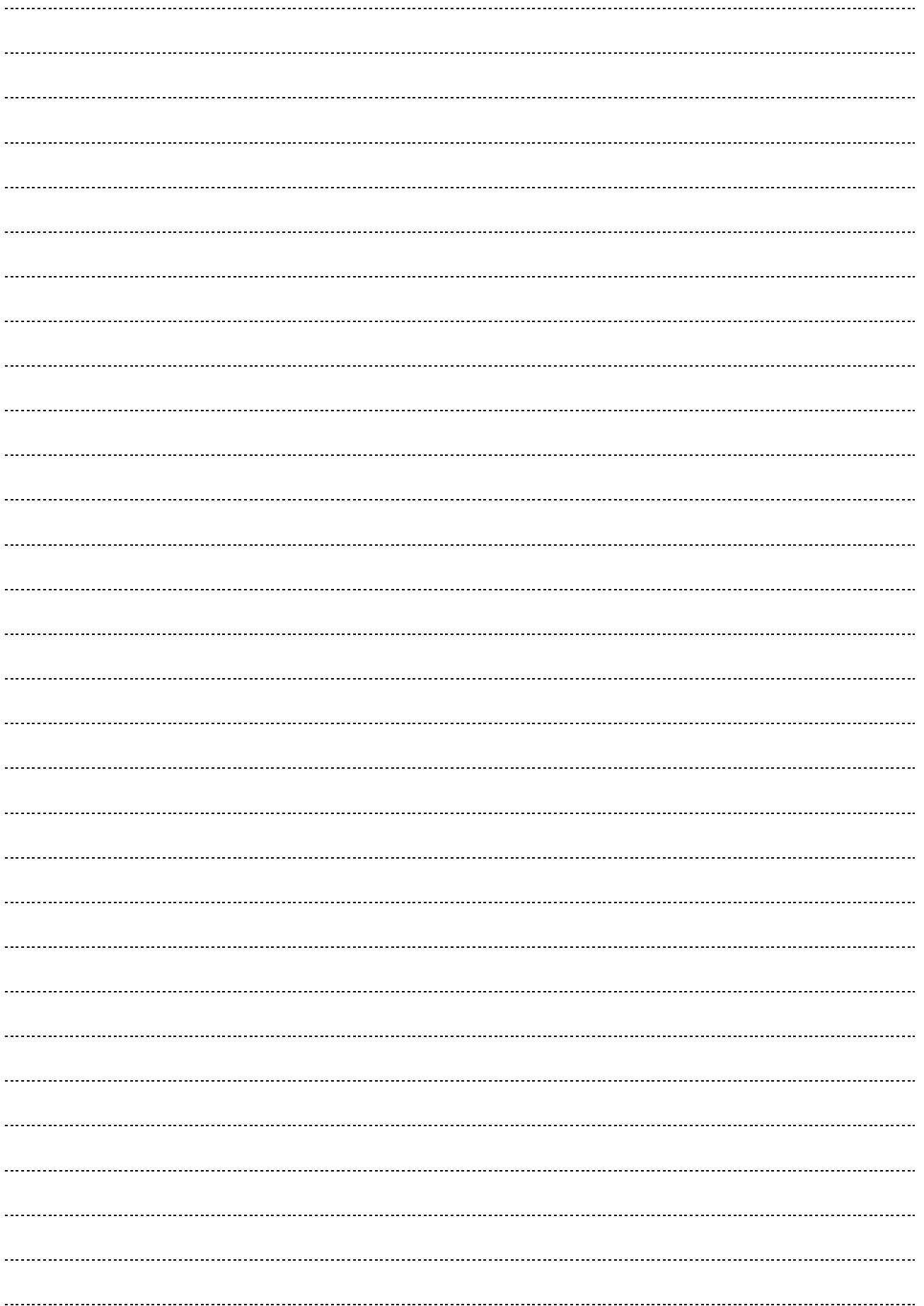
【結果（レクリエーションを復活させて）・考察】

コロナに伴う自粛モードにより暗い表情だった利用者様が、大きく変わってきた。

- ①カラオケを心待ちにしている声が増え、事前に練習するなど、次回来所への動機づけになってきている。
- ②回数を重ねるごとに、自信の満ちた大きな声が出てくるようになっている。
利用者同士で賞賛し合うことで、自己肯定感を高めるきっかけとなっているようだ。
- ③男性には特に大きな変化がみられている。
1日中必要時以外は動かない、話もしない人が多かったが、自らステージまで歩くなど自発性が出てきている。さらに、歌を共通の話題として、コミュニケーションの輪も広がっている。

【終わりに】

このように、デイサービス全体が明るい雰囲気になんて変わってきている。これからは、感染リスクを減らし、コロナのご時世だからこそできる方法や取り組みを考え、コロナ下でもこれまで以上に利用者様を笑顔にできるようなものを提供していきたいと思う。





牧ヘルスケアグループ
医療法人 清翠会